

1
4
332

春雨日記 完

春雨日記



特64

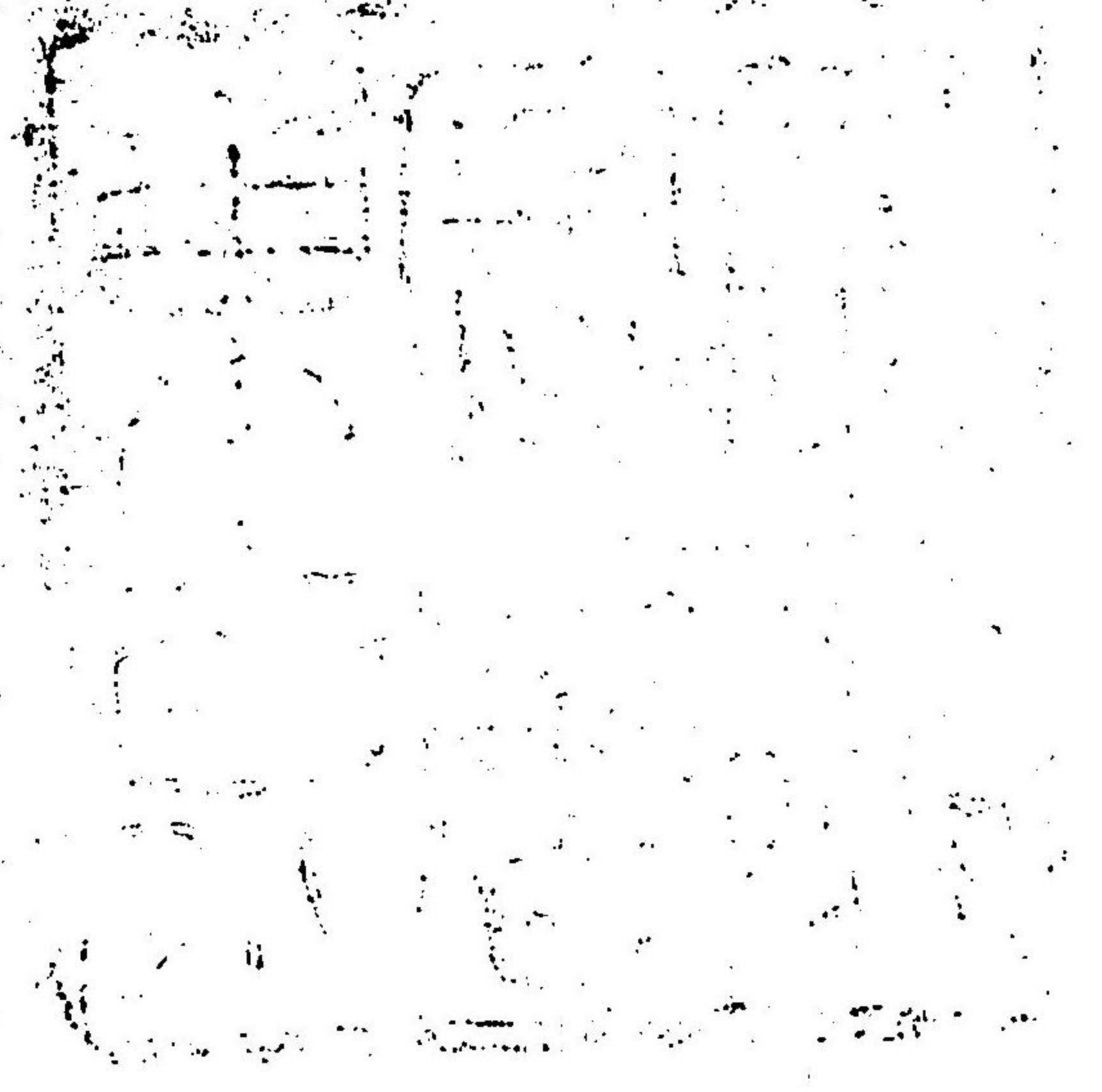
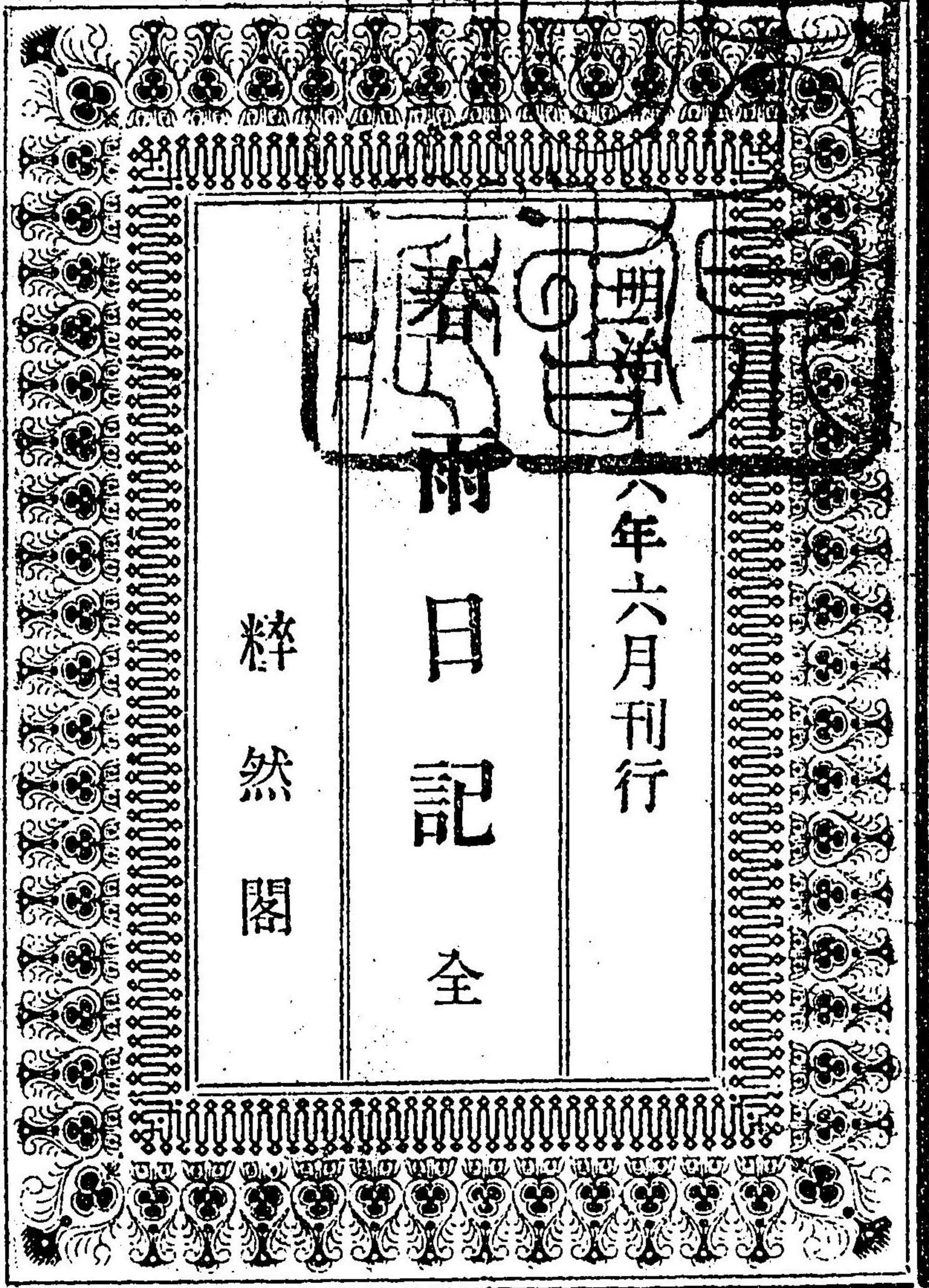
全一七三

春雷

六年六月刊行

兩日記全

粹然閣





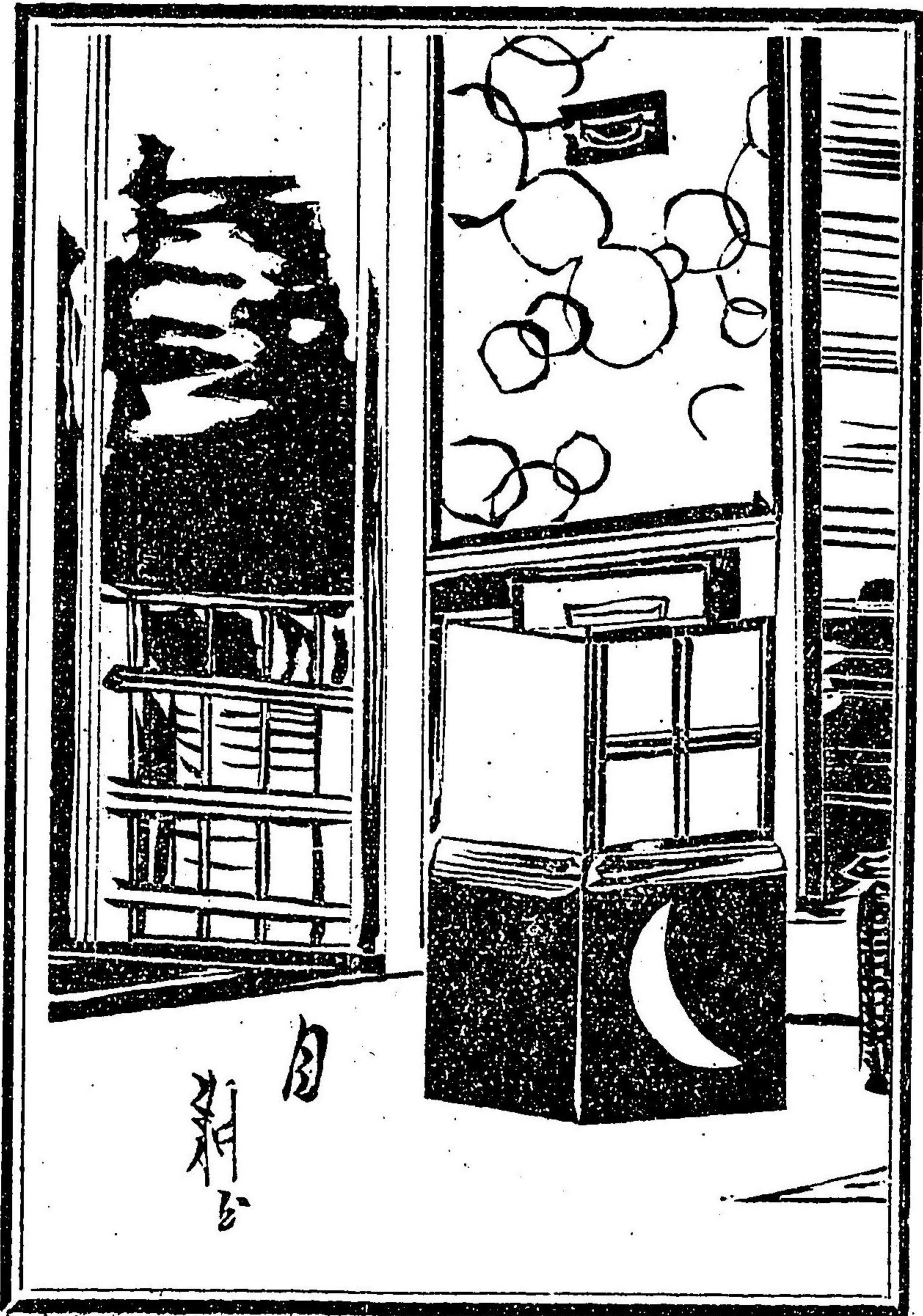
○春雨日記 第一回

笹啼や春の初音も此邊ト東都名所の一つよて紳士の別莊豪
家の寮軒を並べし根岸の里今其名も金杉村と野暮な村名
よ更れども變らぬ色の幾返り五行の松れ片邊柳木の生垣結
園し利久好みの家造り俗を離れし風雅の本色富て奢らぬ藁
蓍家根戸主の誰ども白梅の軒端に薫る一構内ぞ床しき女子
の聲音讀む小説の曲亭翁が世よ名高き名譽の著作夢想兵衛
胡蝶物語の後編煩惱郷の冒頭書(上略)痛ましいかあ一切衆
生の八万四千の塵勞煩惱遂ふ苦海よ沈みてハ井戸へ墮せし

簪同様あがらんとすれど浮む瀬をし世尊こきを憐きみてそ
の煩惱の根だやしせんと八力四十の法門を設けて折伏對治
ありまかれども三千世界一度よハ手ゲ廻りたまハで煩惱郷
を漏されたり」と讀む其聲は黃鶯の谷の戸出て囀づる如く
折から老女の聲としてオ一嫁女太儀く此母の氣を慰さめ
んと讀で聞せる其女の赤心まだ甲夜なりと思ひの外今打つ
鐘ハ十一時四方の人も寢た様子其許もモウ寐たがよい。イ
エく貴女のお好なら徹夜讀も厭ませぬぞお倦よなつたら
お肩でも揉ませうと手に持つ小説を下お措き母が背後へ廻

りつゝ、軟弱き手首さし伸て揉む力さへ、婿竹の細き腕も幸行
 ん重く堪ゆる母の背もホロリと落す一ト、重母の夫と心付き
 コレ嫁女其許の何を泣なさるオ一聞ぬた此母が優しくして
 呉る心も甘へ老の癖とて晝夜どなく追使へる、け切なさに
 ト半分言せず聲濕ませ。勿体ない事被仰りませ假令何のや
 うな苦勞を致しましても貴女も仕ゆるが嫁の役なんで辛く
 思ひませう殊に此身へ浮む瀬あらぬ苦海の波も漂よひしを
 三百圓といふ大金をお出なされて身受され由緒正しき御當
 家の嫁もなさをとて下さとし海より深く山より高き御恩を争

で報せんと心を込めて朝夕に仕へまつれど如何もせん足らハ
 ぬ勝の不束者お氣よ入らぬことあらばお叱りなさをとて下さ
 りませ今しも思ひづ泣ました涙だの種のお踪蹟の絶て分ら
 ぬ旦那様ト言ひせも敢ず機嫌と損じ。又たしても忤ふこと
 かモウ宜加減に斷念たがよい貞孝全たき其許の様を良妻を
 持ながら法圖のない彼が放蕩不孝を子程可愛いと子故に迷
 ふ煩惱の恰度其許が今讀だ八万四千の塵勞煩惱驕と成し恩
 愛も良人に忌れ捨られて倦ぬ別をよ袖絞る涙の雨も皆煩惱
 この斷がたき煩惱を切て捨たる此母が苦しき心と酌取て其



許も俱に斷念よ二度と再び此家へ足踏させぬ積なりト口
 への言ど思愛の羈引かるゝ親子の情猛く見わたるも流石の
 婦女しばたゝく眼も溢るゝ涙笑もまぎらす母の顔打睨り
 つゝ嫁の尙。其若旦那のお放蕩も足らぬこの身がお側よ
 居て御機嫌の取様々悪ひゆる其不束をお叱なく御實子の若
 旦那を勘當なさきて此身とば實子の如くお愛しと勿体過て
 恐ろしく思ふも付ても若旦那が御改心なさきたならどうぞ
 お許しなさきてと本夫と母を身一つと思ひの二つ掻口説く
 嫁と姑の中睦まじき世も稀なる義姑節婦开も此二個の如

第二回

何なる者ぞ回を重ねて説分べし

話説す幕府盛の頃小川町通り邸宅を構へ御小納戸役を勤
 し川上晋十郎と言る麾下あり文の道みの暗けきや武勇衆よ
 勝を鬼神をも怖ぬ猛者よして品行正しき人なりしが此人に
 して此病あり常々大酒を好みて酔は行ひ荒々しく妻の良人
 の酒癖の良らぬとを苦み病て夫が爲め世を早くも遺念の娘
 を残したり名を常子と呼び其心狀父に似て幼少きより武藝
 を好み嘉永二年十三歳の春より神田お玉ヶ池の劍客千葉周

作の門に入り武藝は琢磨の功を積み僅三四年間も上達して
免許以上の腕前となり同門の子弟の言も更なり師の周作も
舌を捲て驚嘆する計なれど去りて常子の婦女の道も欠た
る所少しもなく裁縫の業の素より琴三味線の調べ挿花茶の
湯等の遊藝にも暗からず又其風姿の艶麗なる小町衣通も斯
やとばかり猛く見へても自から優しき腕も傾國の媚を含め
る愛嬌歴現に絶世の美人あれば我手折んと胸を焦し思を寄
るも多かる中に同玄千葉の門下にして出羽庄内の城主と聞
へし酒井左衛門尉の藩士渡邊右内の次男健三郎(そのと)及び

幕府の麾下よて駿河臺に住み高三千石を領する水野何某の
長男平馬(そのと)の二人深く常子に懸想なし折れ觸れ事に托
つけ思の丈を筆に言せ或は直接に袖褌ひき右左よりかき口
説き男勝りの常子なまを未定めなき浮草の浮たる戀路も争
でり靡かん去りて明白も耻しめんも有撃よて柳も風と受流
し体よくあしらし居たりし二人のいと焦思く我こそ戀
の魁けして一番鎗の功名を譲らじやらじと狂ひ出す片思な
る煩惱の心の駒に鞭うちて或日師匠の周作の某太守お招か
きて稽古休の折もよし常に竹刀の音忙しき道場さへも寂

然と平馬健三郎の兩士のみ遠慮の者もあらざむ是幸ひと
水野平馬の健三郎も打對ひ。我戀人常子殿に足下も心を掛
らるゝの素振にて推量せしかど常子殿の斯云ふ平馬も深
き思の有磯海足下が横戀慕せらるゆゑ猶塚せらるゝ事なれ
ば叶はぬ戀と斷念て兄弟子の拙者も常子殿と譲りたまへト
言せも取す健三郎の膝立直し。イヤ常子殿の拙者奴も十分
心のあるかれど足下が妨碍せらるゝ故未だ打解たまぬな
り日頃の兄弟子なまをばとて戀も上下の隔なし足下こそ斷念
らむよト言放る詞も堰立つ平馬。飽までしぶとさ自惚根性

拙者こそ刀も掛け美事手お入おん眼も掛ん其時耻視かゝを
るな。ヤア舌長さその一言命を目的よ我妻と思ひ込だるア
ノ常子いかに足下よ得られんや。然らば常子を賭物とし足
下と我と命の取遣。果合どの面白しイヤ來られよト傍の大
刀左手も引付け膝突つけて疾視たり此方も怯まぬ武士の意
地優さ劣らぬ双方の身構ギリ、と詰寄たる後の話は
次回も譲る

第三回

登下平馬の詞を正し。今爰よて足下と我と命の取遣なす時

この道場を鮮血も汚し師に對して濟ゲたし就ての上野の摺
 鉢山を果合の場所と定め明日の夜九ツの鐘を暗号も同所も
 會する不破名古屋此儀の什麼にと言せも敢ずいよく堰立
 つ健三郎。此場に至りて昇去も其期を延して逃支度去と
 の笑止千萬と言ふ平馬と冷笑ひ。足下が心も比較べ期を延
 せしとて逃ると思ふり足下を撃か撃るゝか二人の一人も傷
 づく喧嘩ろの側材に師の道場を騒がせんと思ひも寄らず
 此場の一旦迭の胸も。納まりかねて抜掛し白刃を鞘も納め
 ても納まりかねる戀の鞘當。當りて碎くる武士の意地然ば

明日の夜九ツの。かねて覺の我本事。开の我よりお見せ申
 さん。イヤ拙者より振舞申さん。先夫までの平馬どの。渡
 邊氏。足下の首の足下の胴へ。互に預て物別を。去らバト
 ばかり右左其日はそのまゝ別をしが翌をバ嘉永六年三月十
 六日晝の觀櫻の人足繁くいど賑はふ花の上野彌生の天も
 小夜更て月のあきとも朦朧たる花曇りの雲も掩ひれて足元
 暗き摺鉢山人跡絶て寂寥たる折ころよけれと双方の身構さ
 らりくと抜放つ夏尙寒さ氷の刃懸の闇夜も閃めく刃鋒迭
 よ激しく聲を合し一上一下と撃太月の音も暇なき生死の際

退バ附入り開けバ閉づ優劣らぬ手練の迅業丁々發矢と斬
 結ぶ折から傍は高く聳へし櫻の老樹の下影より顯はき出る
 怪しの妖怪必死となりて斫結ぶ白刃の中へ跳り入りスツク
 と立たる異形の装束只見きを髪のおどろみ亂し眼の光鏡の
 如く額よ二本の角を生じ隆き鼻逆立つ眉毛口の耳まで裂た
 るが炎の如き舌を吐き鱗形の衣服を纏ひ現は恐ろしき兇体
 魔相平の維持に挫ひしがれし鬼女の面影を摸し道成寺の演
 劇でする班女の顔もかくやとむかり此時雲間を洩出る葉越
 の月の青ざめたる鬼女の面は反射なし尙物凄さを添たるよ

二士のびつくり斬結ぶ刃を引て飛退り逸足出して山を下り
 逃んど焦る後姿を件の鬼女の打詠め。お両士とも暫らくト
 呼留らきて再度びつくり开も此鬼女の鬼か人か次回を讀で
 知たまへ

第四回

件の鬼女の冠りたる般若の面を取除つゝ莞爾笑ふて立たる
 形況雲間を洩ておぼるげに照す葉起の月影は驚ろきながら
 振かへり逃んどしたる水野渡邊慄かく足を踏みてよくく
 見きを筒の什麼に二人の命を賭物ふ戀焦れたる常子なまを

是のどばかり呆れ感ひ詞齊しく云るやう。命を的の血戦も
 足下も迷ふ武士の意氣地生死を争うふ白刃の中へ戯ふれら
 しさ其装束可惜膽を冷したりトいふ顔見詰て笑を含み。お
 両士とも心に心を静め妾が云事よく聞れよ妾が異形の装束せ
 しの足下等二人の血戦を留る爲めの計束躑の温も用ゐた
 る道成寺の衣裳をそのまゝかりよ般若と見掛て足下等二人
 の剛臆を試て見たお思ひさや其正体を能も見認ず刃を引て
 逃たまふ武士に似氣さ臆病未練且又武士と云ものハ國の
 爲君の爲千軍萬馬の修羅戰場も戦死なすころ本意ならめ千

萬金もも換難き大切な命を婦人の爲も輕んじたまふの愚の
 至かゝる放呆さ貴君方に肌身を任す妾ならねど簡程迄も思
 しめす切あるお心に絆されて色よいお返事したけれと桃と
 櫻のお二方向れと何れと定め兼をバ今改ためてお二方にお
 渡し申す般若の面此心を解當たまひし男郎の方へ靡させ
 うト言つゝ手も持つ般若の面二人が前へ投出し。武士が一
 旦抜た刀血を見ずして元の鞘も納める譯にも行ますまいイ
 ザ此面を二つ割各々お持歸られて篤とお勘考あそバせと言
 きて二人の異議も及ばず提げし白刃を取直し般若の面をま

ツ二つ各々懐中よ之を納め月のほきどもほの暗き戀の暗路
 を辿りつゝ立去る二人の後影見送る常子の豫てより傍の木
 影よ待せ置たる一人の家僕を呼寄て鬼女の衣裳を風呂敷よ
 包てやをら脊負せつ我家をさして歸り行く斯て平馬の面の
 謎を解當んとて三日三夜我部屋よのみ閉籠り種々よ考へた
 きど能き案じも出ざるよぞ思按あげ首窮すきを濫すと云る
 小人の戀路よ迷ふ頑固よ獨熟々思ふやう健三郎の日来より
 文學よさへ富たきや定て面の謎々も解て結べる戀人の常子
 と契を重ぬるならん斯る筋より弟門下の彼奴よ常子をとら

きてハ男の意氣地が立難し憫然あがらも人知をす健三奴を
 撃果し然して後よ兎も角も思慮なさんと淺墓にも覺悟決め
 し平馬の察しに違ふことあく健三郎が首尾よく面の謎々を
 解當たるや當ざるや將亦この後の話頭の什麼よ次回を讀て
 知ねかし

第五回

單表渡邊健三郎の常子が掛たる心の謎首尾よく解當て平馬
 奴を出抜くきんと同トく家よ垂籠て三日三夜工風を凝し漸
 やくよして悟り得しか思按よ組たる腕を解きハタと打たる

膝頭溜息吐てひとり言嗚呼過まぢぬ過まてり謎の心を解得
 て見を今更も面目なし曩の夜平馬と生死を争ふ果合の
 場所よて常子ケ異形の形装も恐をおのゝと逃去るを呼
 止らきて臆病と戒しめられた其上も今又般若の面よよそへ
 掛たる心の深き謎淺き心よやう〜と悟をば實も是やその
 濁世煩惱色欲界その故如何よといふ時の般若の文字ハ梵語
 よて悟道を進むる意味とか聞き今その般若の木の面を武士
 の魂ハ同様なる刀を以て二ツも割しひとりも直さず色慾界
 の煩惱の羈を断しも同様また人世に絶てあらざる般若の姿

にいでたちしハ外面如菩薩内心如夜叉と釋迦が教えを眼前
 悟らしめたる常子の頓智迷ハの夢の覺て悔しき實もあるま
 トと擧動なり過にし事は悔るもおよばず是より降魔の利劔
 を捨て身を佛門よ委ねんと活然として決心せしが去よても
 常子どのに漸やくよして悟り得し謎の心を告ずしてこのま
 別きんも口惜し責て一筆書送らんと右等の由を細々と筆
 よ言して一封の書状を認ため下僕も持せ常子方へと送りな
 る平馬のかくともしら露の血氣も迅る無分別とても角ても
 戀の仇健三郎を撃果し我思ひを遂んとて執念く賣ゆる迷ハ

の雲日にく健三郎が藩邸なる神田橋内の酒井邸の四方を徘徊して居たりしよ或夜健三郎の下僕が状箱と携さへて通用門より出るを見認め撃取る手掛を得たりと喜び下僕を賺して種々と健三郎の様子を問べ下僕の答へて。若旦那の先頃より御病氣にて垂こめてのみ在すきと實の貴郎も御存じの通り常子どのへの戀煩らいと言を平馬の打笑ひ。シテ今時分何處へのお使。其常子どのへ若旦那より。ソリヤ健三郎より常子の許へ。何やら艶めくこの手紙ドリヤ一走りト言捨て口善悪なくも嘯づりつ彼方をさして急ぎゆく偕の

と平馬の下僕の跡を白眼が如く見送りて何か心よ點頭ながら思按り道も引換て八代洲河岸の方へと立去ける

第六回

話頭一轉て健三郎の常子が掛たる般若の面の謎の心を解當て深く心に愧つゝも活然として悟を開き世を捨て高野へ登らんと武者修行の爲め六十餘州を遍歴したき旨を述べ父右内より三年間の暇を乞しよ右内もまた武者修行と聞き敢て止めずまだ部屋住の健三郎も又主君に言上するよも及むず翌日の幸はひ吉日なり善の急げの譬もゆきは明るを俟て發

途せよと父母の許しよ歡てふ健三母と脚半よ笠の紐よと我
 子の初旅の準備しつ苟且ながら三年間の別と思へば何とな
 く名残をしさの女親進まぬ心を勵まして甲斐くしくも旅
 の支度を残る隈なくして呉る父と母との顔色を見るよ付て
 もせき上る涙よ絞る袖袂慈愛の深き父母を浮世と俱よふり
 捨て一婦の爲に佛門よ入しと後よ聞たまひし無やお嘆きな
 さるべし遁れぬ不孝の罪科と只お宥しと願ふのみと言ふ言
 きぬ此場の仕義りゝるべしとも知らざる右内母のお里も諸
 共お早く琢磨の功を積み天晴武術の達人と成り上りて歸る

日を屈指かぞへて待ますると迭代りの教訓慈愛春の夜早明
 そめて曙ばの告る鶏の聲名残は盡じイザ去らばお兩親とも
 随分御無事で其許も健固でと親子互よ別れの一句去らばと
 ばかり言捨て立出る健三見送る兩親心残して此年來住も馴
 んと藩邸を漸くよして立出つ振膽みよ父母の恩高きが上
 に彌高きまだ明やらぬ中天に輝やく星を戴だきて八代洲河
 岸の堀端へと來掛る折しも後より誰と知らず駈寄て閃め
 き渡る劍の電光咄嗟と驚ろき振融る健三郎の肩先を破羅淋
 すと斬付たり

第七回

斬れながら健三郎少しも怯まず聲あらしげ。何奴なきが
 卑怯も詞も掛すと云せもあへず。驚ろきかまうか平馬か
 り過よし夜上野の果合よて足下の命を貰んとせしと戀人
 常子よ支へらと遠廻しなる心の謎解も無益な武士の意切刃
 よ掛ての戀争りい女々しき業の謎々を解より迅き平馬の太
 刀筋受らるゝから受て見よと聞て健三の平馬よ對ひ。开の
 短慮なり水野氏常子の足下の隨意なるべし我等の謎の極意
 を悟り。サア其極意を悟りしからの生して置れぬ天故よ。

殺さんとする足下の覺悟は現に大いある誤解なりと言ども
 聞ぬ平馬の怨。ヤア卑怯なり健三郎事に托へて此場所を逃
 んとするとも逃さんやト又斬付る無法の太刀風深疵なごら
 も健三郎怒の面色朱を沃ぎ餘りト言ハ無法千万假令深疵の
 負たりとも手を束ねて撃をんやト引抜く刀を杖として蹠跟
 く足元踏まめつ漸やくおして起上り二撃三撃斬結ぶ一進一
 退死生の前心の矢竹も憚るども最初の深疵よ健三郎撃太刀
 亂れて後の方へ峻巡く處ろを附入る平馬横よ薙たる太刀風
 鋭どく腰の番を丁と斬る斬らきて健三を横様よ堂と倒るゝ

开が上に乗し、蹠つて致死の一刀柄も貫きと刺んとするを跳返しつゝ、上ある平馬を下り、組布き死物狂刃逆手に平馬の胸板苦嗟と貫ぬく下よりも突出す刃に咽喉を刺きて苦と叫びもあへず双方急所を貫ぬき合ひ合撃となりて息絶たり兎角する内夜も明けき、通行する者ありて二人の死體を見認め最寄の辻番所へ訴たへしかば夫々取調べの上姓名も委しく解りたき、親元へ引渡さしを双方の親元も涙ながら引取つ内済の示談整のひて事故なく済しとぞ（記者曰す兩人が親達り我子の横死を遂しを悲しみの段死體取片付等種々

の騒ありたきと繁雜しけき、零きて記さず是より又常子が身の上と就て一條の物語あり次回を讀て知たまへ

第八回

山寺の春の夕暮來てみき、入相の鐘と花ぞ散ける。東叡山の春景色、黄昏告る鐘の音も人も櫻もちりり、家路をさして歸る中、花見る人の長刀ひけらかしつゝ、兩個の武士いたく酒よ酔たるが櫻の技を手折來て明樽をば括し付け肩よ擔げて千鳥足人品よき一人の娘を中よ挾んで左右の手を取り、戯ふきながら歩み來る娘の怖さ恐ろしさとぞうぞお宥しなさ

きてと言とも聞ぬ件の武士酒臭き頬を摺つけ或の首筋よか
 ぢり付など見るも得堪ぬ醜体を娘の愧て捕られたる腕をや
 つと振拂ひ。此處までお送りやしたまへモウ能加減もお宥
 し下さき左様あらばト言捨て行んとするを一人の武士ドツ
 コイ遣らぬと引止る其手を拂ふ手練の手刀撃れて苦と痛さ
 よ堪ずや聲荒らげて言するやう。その美しい顔をして今の
 手際とコリヤ如何だと呆るゝ兩士の顔を見娘の片頬よ笑を
 含み痛くのお止なされずとお免しなされて下さりませと言
 せもあへず堰立つ兩士女達も無禮な舉動さう強情を張から

と可愛さ餘つて憎さが百陪呼吸の根止てくそんすと怒も任
 せて威の爲さらりくと引抜く大刀白刃も動せぬ件の娘飛
 掛るよと見る間に難なく白刃を打落し一士が弱腰突飛せば
 踏蹴あからよ不忍の池へ水入と眞轉倒酔醒の水十分も喰は
 せられ懲もせず落たる白刃を拾ひ取り又斬掛る一人の腕を
 肩まで捻上つ此にお懲遊ませど口數利す徐々と跡をも見ず
 して立去ける开も此娘を誰とかする亦那川上常子也此日朋
 友の娘連と上野へ花見も行たるも前なる武士の手込も逢を
 さし難儀も及びしを常子の連の娘達を先へ返して只一人

二個の武士は誘引れ池の端まで来りし時いくら詫ても免さ
 ねバ余義なく彼等を懲せしかり又此武士の薩藩の宮坂連次
 永井秀熊と云る者よて秀熊のやうくと池の中より這上り
 連次と顔を見合せて跡を追べき氣勢もなく芝三田の藩邸へ
 這々の体よて逃歸り深く耻て他言せず心よ秘て居たりしと
 ぞ箇の是安政元年春三月の事よして常子が十九の時なりし
 が此一條より常子が身に不思議の奇禍を惹起す委しき咄し
 の例の次回

第九回

却つて説く宮坂永井の両士の痛く常子よ懲されて芝三田の
 藩邸に逃歸り深く耻て他言せず心よ秘て居たりしが隠れた
 るより顯へるはあくいつしが一藩の評判となり武士を研
 く隼人の國風皆爪弾して兩士を黜け一婦の爲に挫しがれ鳴
 呼く逃て歸るとい言ふ様なき臆病未練此儘よ捨置て他
 藩の嘲笑を受け鹿兒島一藩の瑕瑾なりとて頼て兩士を本國
 へ逐歸し詰腹を切らせしとぞ當時下谷和泉橋通に道場を構
 へ千葉周作と互角の勢ひを張る一刀流の劍客伊庭軍平と云
 るゆり或日稽古休ふて七八名の門弟等道場よ集り各自武藝

の自慢話じまんばなし中なかなる一人ひとりが衆しゅうよ向むかひ千葉周作ちやうさくの門下もんかよは恐おそる
 者もの一人ひとりもなけきど只心憎たゞこころにくきの川上かなかみの娘常子むすめつねこなり彼此程池かれこのまじいけ
 の端はたにて薩藩さつぱんの武士ぶしを二人ふたりまで手球てまりに取とりて投退なげのけし女むすめよ稀まれな
 る力量りきりやう迅はや技適晴ぎあつはれ美事みことの手際てぎはなりと市中しちゆう一般ばんの大評判おほひやうばんるれよ
 ひき換かへ伊庭いせいの門下でしよのみな腰拔こしはげばかりなりと世間せけんの人の
 口くちの端はよかゝる風評ふうびやうもゆりとかさゝぬ遺憾ごんげん至極しごくの事ことからず
 やと席せきを打たいて敦園いさだけバ傍そばから一人ひとりが進すすみ出いで然さに去さりながら
 常子女つねこめの假令たとへ鬼神おにがみを挫くじひしぐ神變しんぺん不思議しぎの術じゆつありとも高たかの
 知したる婦人をんなの假非業折あせせむせりがなあらバ雌雄しゆうを決かつし彼かれよ巴ともへの勇ゆうあ

らば我われ又また義盛ぎせいの才智さいちを以もて只一擲たひつつかみよ生捕いせりて妾めかけよせんと思おもへ
 ども未いまだ其機そのきよ出逢であぬを日來ひごろ遺憾うらみよ思おもふなりと鼻搖はなうごめかす
 大言たいげんを聞流きながしつゝ又一人またひとりが末座まつざよ扣ひかへし戸倉くら字佐美さみを屹きつと見
 顧かへり詞ことばを正ただし足下おんみの常子つねこよ不覺ふかくを取とり夫それが爲ため詰腹切つめばらきられ
 た彼永山氏かのながやましどの同藩どうぱんならずや殊ことよ苦樂くらくを共ともよせんと義兄弟ぎけいてい
 の約やくを結むすびし親おやしき中なかと豫かねて聞きく然しかるよ義兄ぎけいな永山氏ながやましの死しす
 るを餘所よそよ見流みながしつ常子つねこを撃うつて義兄ぎけいの爲ため仇あだを報むくゆる御所ごしよ
 存ぞんなきや點念だまづてござるのハ、ア聞きねた足下おんみの常子つねこよ臆おくせし
 な足下おんみの如ごとき臆病おくびやう武士ぶしが伊庭いせいの門下もんかよあればこそ我儕われらの言いふ

及およばず先生せんせいまでの面汚つらとごし明日あすより千葉ちばの門もん入り常子つねこの
 屁へでもお臭かきめされと異口同音くちごんごんと嘲あざけられ活くわつと堰立せきたつ血氣けつきの
 宇佐美何條常子うさみなんどうつねこは臆おくすべき各自方おのくがたの御助言ごじょげんなくとも朋友ほうゆうの
 仇讎あだかたきうち擊果きくたさんと豫かねての覺悟かくご今いまより向十日まじを期きし常子つねこの生首なまくび
 を持來もちきたり各自方おのくがたのお目めは掛かけんと放言いひきる詞ことばを聞きく人々ひとびと夫それでこ
 そ眞まことの武士ぶし併しかし今演いまのべられた足下あしもの詞ことばは違たがひなく常子つねこの生首なまくび拜はい
 見けんせし時今ときいまの過言くわごんのお詫わがやうやさんと堅かたく約やくしてその日ひの其儘そのま
 右みぎと左ひだりは別わかれし後のち字佐美さのみの常子つねこを擊取うちとるや否いな次回かいは於おいて説とぎ
 分わくべし

第十回

戸倉宇佐美とくらうさのみの同門どうもんの甲乙たれかれり等せんどうは煽動せんどうされ漫そゝろは惴はやりて十日の間うち
 に常子つねこの生首なまくび携たづさへ來きたり各自方おのくがたは見みせ申まうさんと詞ことばを契つあへて
 別わかれし女子おんなでこそは彼常子かのつねこは力量りきりやう迅はや技衆わざむねは秀すぐれ速とても尋常じんじやう
 の勝負しやうぶは及およびがたしと思おもふよぞ折せりを窺うかがひ人々ひとは暗やみ
 撃うちよせんものと卑怯ひきやうも思おもひ定め常子つねこの他出たにゆつを覗うかぶひ居ゐた
 りかゝる仇あだのありぞとも絶たじてえらざる川上常子かはらみつねこの宵たに武藝ぶげい
 のみならず琴三味線ことさ手踊せんて等の遊藝ゆうげいまで其師そのしは就ついて習ならひ覺おぼえ
 雄々むむしき業わざを爲なすといへど心狀こころざ正ただしくて女子おんなの道みちは欠かけたる事こと

なく朋友さへも多かる中お麴町山本町に住む舞踏の師匠坂
 東秀次といへる者との姉妹の如く交り厚く殊に年齢とい
 ひ顔貌まで他人の空似か爪二つ割らでそのまゝ生寫し知ら
 ざる者へ眞實の姉妹なりと思ふもありとか案下休題その年
 の霜月下旬常子が父晋十郎の役頭小日向水道町の平岡何某
 方よて長男某の誕生日の祝宴を開くよ付き親類縁者の言も
 更なり親しき人々を呼集へ酒席よ花を添るため夥多の藝人
 を招き寄せ落話手踊品玉遣各々得意の藝を演し飲つ喫ひつ
 深更るまで笑ひ動搖めく愉快の酒宴客も主人も興入り夜

の更るをもしらざりたり此夜常子も父と俱に平岡方へ招か
 れしが父晋十郎の親類中よ少しく障る事ありてその招きよ
 應せず常子のみ席よ連なりをさへ興を添て在り此事早く
 も窺がひ知りたる戸倉宇佐美の勇み立ち時機來れりと宵の
 間より平岡の屋敷外を其處此處と徘徊し内の様子を窺がふ
 ものから是といふ便を得ざれに心頻に焦立のみ佇立ながら
 夜を更し傳隨院の鐘の聲屈指見ればはや亥の刻酒宴も稍果
 しと覺しく内の騒ぎも鎮まりておひく歸る來客の内に紛
 れて同家の門より出る女の後影頭巾眼深よ冠りしゆる顔の

定に忘れざれど衣装の兼て見覺ある縞縮緬の二枚重先も立
 たる一僕が振照し行く提打の紋の覺の三つ柏イデ一撃と遣
 過し水道端の適宜の場所と先へ廻りて一僕が照す提打切落
 し返す刃を取り直し永山の仇思ひ知れど踏込て撃つ必死の
 刃鋒肩より脊筋へ大袈裟も斬れてウンと倒るゝ上へ踏跨ぶ
 りて致命の一刀柄も徹れど刺貫ぬく急所の痛手も堪るべき
 さしも剛氣の女丈夫も不意を撃れて哀むべし刀下の鬼と消
 失しの惜ても尙餘あり

第十一回

斬付らきて到れし時冠りし頭巾の取たるも折しも雲間を洩
 出る亥中の月も仇の顔よく見れり箇の什麼に常子もハ
 わらざりけり驚き呆るゝ戸倉宇三美南無三寶と血刀を拭ふ
 て鞘に納ても納まり兼る胸の中才智過れし常子ゆへ我の機
 密を察せしが彼が智謀もかゝる間違今更悔るも奈麻與美の
 甲斐なき思按をなさんより三十六計逃るも手なしと思ひ返
 して又曇る闇夜に紛きて電光の閃めく如く逃失り事起
 源を尋るも此夜常子を豫てより姉妹の如く交情深き彼の坂
 東秀次を誘ふて平岡方の招きも應じ舞踏の一手も酒宴の興

をおさく添そへて居ゐたりしが秀次ひでじと母ははが病氣びやうきゆへ一歩ひとあしお先さきへ
 歸かへりたく跡あとの處ところのよゆやうふと頼たのむを聞きて點頭うなづく常子つねこホン
 小母かさんが待まちてゐるう私わたしも構かまはず少しも迅はやふ併しかし亥刻よつよ
 も程ほど近ちかし何事なにごともあるまいが私わたしの家僕いえやくをお連つれなさい幸さいひ提て
 灯ちんもほりますからト常つね又また變かはらぬ常子つねこの親切しんせつじ自分ぶんが家僕いえやくお心
 得いさせ送り届とどめる用意よういをなし此寒このさむいのお前まへまで途みち中で風かぜ
 邪せでもひいてはならぬ不躰ぶしつげなぶら私わたしの羽織はおり此衣類このきものを着きてを
 いでと持もつて來きたりし着換きかへの衣類きものハイ有難ありがたふ明日あしたお屋敷やしきへお届とど
 け申まうします貴君あなたさま誠まことにお御苦勞ごくろうですト人ひとを外そとさぬ秀次ひでじの愛敬あいけい下げ



秀次ひでじの横死よこじを
 聞きて水道端すいどうはたよ
 仇かたきを索もとむ

男よまでも禮を述べ打連立て平岡方を出しを常子と間違へ
 らを暗々宇佐美お撃れし秀次の不幸と常子の幸ひ世の塞翁
 の馬なりけり」恠て常子の此變事を秀次の供よ遣はしたる
 下男の急報よ始めて聞知り急ぎ現場へ馳付て其筋へ訴へし
 かバ其夜の中に檢視も濟み涙あぐらら秀次の死體を山本町
 なる同人の家よ引取り秀次の母よ右の次第を告たるよ病を
 常ある母の歎き娘が死體を見るとそのまゝ一時差込む瘡
 よ閉られ果敢なく鬼籍お入たるより常子と有よも有れぬ思
 ひ責ても思ひ出よ自から進んで施主よ立ち秀次母子の野

邊の送をいと立派よ營おみつ該夜秀次を送らせたる下僕よ
 様子を探ねしよ彼曲者の永山の仇思ひ知れと名乗掛たと聞
 よりも情の我爲よ切腹せしと聞く彼の薩藩の永山が知己朋
 友の誰人か此身を仇と覗ふなるべく人違よて他の女を殺せ
 しとの残念さよ執念く撃んとなすなるべし其機に乗じ我も
 また其曲者を誘き寄せ秀次の仇を報せんと胸よ浮びし一工
 夫信願の筋ありて夜よ神田明神へ參詣なすと言觸せし
 よ宇佐美は迅くも聞出し謀らるゝとも露しらす今度ころの
 日來の本望只一撃と或夜よ紛れ神田明神の境内なる立木の

影も潜を居て常子の来るを待掛たり

第十二回

詣来る常子の後より拔撃し斬んとする脰を止むる拳法の奥妙難なく宇佐美を取て押へ膝下に組布き動かせず柳も齊しき細腰も宇佐美の爲よの大盤石跳返さんと搔悶ども更よりの甲斐ゆらざりける常子の静よ言るやう何の御藩士か知らざれど妾を仇とし覗ひたまふの察する所永山氏に縁故のお方と覺えたり襲の夜妾と間違へて水道端よて踊の脚匠坂東秀次を殺害せし足下の所爲も違ひ有まじ永山氏の爲仇を

報はんとなら武士の武士の作法あり何故尋常も名乗掛て勝負を其場も決したまはぬ殊も永山氏の女と悔り無禮の舉動ありたる上不覺を取し身から出た刃の錆と成果しも自ら醸せる罪にして怨るゝ覺嘗てなし然るを是非の思慮もなく執念く妾を撃んとなら妾も亦秀次の仇怨の此方に在ものを足下を撃で置べきうイザか名乗遊せと言つゝ膝下に踏布たる宇佐美をやをら引起せば愧て頭を擡げ得ず稍あつて常子も向ひ恐入たる貴女の教訓迷の雲も晴て又名乗も今更面目なけれど拙者の戸倉宇佐美とて彼永山との交り深き竹馬の

友ともあて候さふらふなり貴おんみ女むすめと間違まちがへ秀ひでじ次じとやらを殺せつがい害がいせしも我わが
 誤あやまり生なま兵法へいぽう大おほ疵きずの基もと礎もととなりし我わが不ふ運うん怨うらみは晴はれつ常つね子こど
 の我わ首くび刎なて秀ひでじ次じとやらの仇あだを報はらじたまへかしと覺かく悟ご決きめし
 有あ様さまに常つね子こも詞ことばを和やはらげて斯かくお心こころの解とけし上うの争いで足あ下しもを
 撃うたるべき妾めかけも怨うらみの晴はれました併しかし今いまのお話はなしでは妾めかけの首くびを得え
 玉たまのすい足あ下しもの武ぶ士しが立たちますまい夫それの妾めかけの片かた袖そでを持もち歸かへり
 て御ご傍わき輩ばいの昨さく夜や云これ々くの所ところよて常つね子こは出で會あひ斬きり掛かしに彼かれの
 忽たちちに怯おそれを取とり一いつ刀とうの下もとに命いのちを乞こふよぞ殺ころすも無む益やくと命いのち
 代がはりに彼かれの片かた袖そでを持もち歸かへりしと偽いつはりて告つげたまへし足あ下しもの顔かほも立たち

といふもの女をんなの入いらぬ武ぶ藝げいゆる妾めかけの恥はぢと思おもひ侍よべらずと言いはれて
 宇う佐さ美みの尙なへ愧はぢらひ義ぎあり信しんあるそのお詞ことば御ご親しん切せつは難ありけれ
 ど争いかで去さる僻ひか事ごとの出で来きべきぞ死しすべき時ときも死しせざれば死しよ
 増まる耻はぢありとか我わも聊いささか廉れん耻ぢを知る切せつ腹はらあして相あ果はん憚はぢ
 りながら常つね子この介かい措しやく頼たのむと落おちたる刀かたなを拾あひ上あげて我わ腹はらへ
 突つきたて立たんとする其その手てを止とめ迅はやりたまふを戸と倉くらの死しの易やすく生せい
 は難かたし左ひだりほだに思おもひ誥つめたまへし腹はらも換かへて髻うきを浮うき世よと共ともに切き
 捨すて佛ぶつ門もん入り秀ひでじ次じの爲ため且かつは永なが山やま氏しの爲ために跡あとねんごろよ
 弔とむらひたまへと道ことば理り責せめたる説せつ論ろんの詞ことばは漸やうやく服ふくせし戸と倉くら宇う

佐美常子も別れて其場より圓頂黒衣も姿を變へ父母の許へ
 は手狀を以て右の由を言送り身の暇を告やりてさして行衛
 も定めなく飄然として立去ぬ渡邊健三郎は磐若の面の謎々
 も悟を開いて煩惱を斷ち高野へ登らんとして果さず終り非
 業の刀に死し死を決したる戸倉宇佐美の却つて佛門へ入を
 得しも其事相似て其實同じからず奇中の奇と言まくのみ

第十三回

單表宇佐美の父戸倉甚五右衛門の此程より悴宇佐美の家
 在る日之稀にしていつも夜更て歸宅なし以前に變る身の行

爲不審きとのまなきを若年者の癖として悪き友も誘引出さ
 れ遊里など入込むならん折もあらば異見せばやと思ひ居
 たるに家出せしまゝ四五日過ても歸宅せざるに今はや捨
 おさげたしと自から伊庭の道場へ行き傍輩弟子の甲乙に問
 合せしに此程は絶て稽古にも來らずといふ儲も不審と思ふ
 ものから他も心當もあらずれば焦立のみにてせん術なき
 まゝ又二三日打過しに家出きてより十日目の夕方飛脚が投
 込む一封の書狀は正しく悴の手跡途中よりとあるも氣遣は
 しく封じ目とくく讀下せば永山が自殺の始末より傍輩弟

子よ教峻のつかされ常子つねこを撃うんとて秀次ひでじを殺ころし明神めうじんの境内けいだいよて常子つねこよ出會でめひ教戒けうかいされし始終しじゆうを委くはしく認したため武士ぶしの一分ぶんた立たざるよ耻はぢ高野かうやよ登のぼりて出家しゆつけを遂とぐる志願しぐわんなりとあるに驚愕びつくり心この中うちよ歎たんずるやう永山ながやまが死しの武士ぶしに似氣にがなく婦女にんなよ對たいして無禮ぶらいの舉動ふるまひ却かへつて耻ちを招まねきし上切腹うへせつぷくせし自業自得じがうじその永山ながやまが非ひを受繼うけつぎ執念しよくねく常子つねこを撃うんとして却かへつて彼かれよ説伏せきふせられ弓矢ゆみやを捨すてて佛門ぶつもんよ入りし悴字せがれうざ佐美さみが胸甲うでが斐ひなき狂人きやうじん走はしつて不狂人ふきやうじんも俱ともよ走はしるの舉動ふるまひなり世よの嘲笑ちやうげりも後身影うしろめだく子の罪つみの親おやの罪生つみいきて耻ちを晒さらさんより潔いみぎよく死しするよ如しかずと決心けつしん

し妻つまの世よを早はやうして家いよの一僕ぼくあるのみあれば心易こころやすしと事ことよ托よこへ彼かの一僕ぼくに金若干かねごとくを與あたへて身みの暇ひまを取とらせ切腹せつぷくをして相果あひはてたり素そより此このよ由よししる者ものなく遺書かきおきさへもあらずをば甚五左衛門じんござゑもんの最愛さいあいの悴せかれが家出いであを苦くに病やんで恩愛おんあいの絆斷きつなたつとりたく夫それが爲ため發狂はつきやうして自殺じさつしたるならんと言いひ囃はやされ其家そのい家いえ遂ついよ斷絶たんせつせしはいと淺あましき事ことなりと見る人眉ひなまゆを顰ひそめ聞人唇きくひとくちびるをひる翻ひるがへせり程經ほどへてて常子つねこが此風評このうはさを人ひとの話はなし又聞傳きつたへ吾儕わなみいかなる罪障ざいしやうありてや自みづから手ての下くださねど渡邊水野わたなべみづのの吾儕わなみを慕したふ戀争こひあらしひより刃傷はんじやう及び永山宮坂ながやまみやさかの切腹せつぷくし又秀次またひでじの吾儕わなみ

が身代みかたは非業ひがうの最期さいごを遂とげたるより引續ひきついて其母そのはも果敢はかなく
 消きし夢ゆめの痕あと戸倉とくら宇佐うさ美みも我わが非ひを悟さとり死しを決けつしたるも漸やうや
 く宵よめ今いまとあつて其父そのちちは自殺じそくを捉とらがす媒な介かとなりたる事こと
 の悔くしさよ數かずふれば此身このみの上うへより罪つみなき七人にんの命いのちを縮ちぢめし
 んいと罪深つみふかきとにして頓やがて此身このみを廻めぐり來くる輪回りんねの科とがを恐おそる
 し、と雄々むむしき心こころも挫くじけつ、責せめて亡人なきひと々の菩提ぼだいの爲ためめ佛ほとけの
 道みちよ入いらばやと交まじり變かへねど心こころの内うちに世よを思おもひさり髪かみの尼あまとな
 つたる積つみりよて一間ひとまの内うちに引籠ひきかこり太刀たに代かへたる珠數たまごの緒いとを爪
 繰ぐるより外ほか他事たがこともあし斯かくてろの年としも暮くれ安政あんせいも二年にんとなり

早はやいつしかは花散はなちりて若葉色わかばいろ増ふす青山あきやま邊へは杜鵑ほととぎすも啼過なきぎて淋さびし
 き庭にはは桐きりひこ一葉涼風すいれいふうろよぐ秋立あきたちて冬十月ふゆ二日の夜よ天地てんちも崩くづる
 大地震おほぞしんは際さいし常子つねこの働はたらき如何いかならん

第十四回

古今ここん未曾有みそこうの大地震おほほち震しんは常子つねこの父ちち晋十郎しんじゅうらうの素もとより剛氣がうきの猛者もうさ
 なまよ少しも周章あなてす裏口うらぐちより戶外おもてへ出いでんと身みを起おこす那時かた遅おそ
 く此時あつとき速はやしメリ、倒たうと落掛おちかる梁はりに壓おさきて哀あはれむべし果敢はか
 なく其場そのばは死しんでけり此時このとき常子つねこの例いづもの如ごとく我部屋わがへやは垂籠たれかごて觀み
 念ねんの外ほかなかりしよいと凄あはれまじき物音ものおとして天地てんちも崩くづる、計さかり

なきバ借の地震と知よりも雨戸蹴放し庭面へ身を跳らして
 逃を出しか父の身の上心許なしと傾ふき掛たる家の内へ辛
 くして潜り入り彼方此方探せど影だも見ぬ不兎角するうち
 行燈の倒をしより火起り焰々として燃上る炎も焦さを烟も
 巻を漸やくよして父の居間まで至りて見れば淺間しや目も
 當らぬ壓死の体も尋常の女子なりせば氣も失せ魂しひも
 消へき元より雄々しき常子なきバかゝる天災の其中にも
 更も動せず梁を彼方へ押除て父の死體を引起腰帶とくく
 脊も負ひ十字よしかと結び付け準備の懐劍閃かし出口く

を切開き炎を脱きて元の庭へ出たる時の働らさの目覺しく
 も又勇ましと聞者驚嘆したりしとぞ恠て晋十郎死去の後
 親類縁者の言も更なり組頭等打集て川上の家名を繼續せん
 と常子も智を勸むほど思ふ仔細のあきバとて堅く拒みて従
 がないず因て晋十郎の甥なる幕府の家人但馬集之助の二男幾
 之助と下谷二長町の青木助右衛門の長女お筆の男女を夫婦
 養子とし家祿も以前の如く養父晋十郎の職役も就き家名相
 續なさしめたる後の話の次回に説べし

第十五回

當時駿河臺に邸を構へお側御用を勤むる中野遠江守といへる人あり時の將軍の寵を得て飛鳥ひとす威權あるより其家隨がつて富榮へ桂を焚き玉を炊ぐ驕奢の舉動あるものから不義非法の所爲なく人を知るの才高く一見して其人の賢愚を知るとの評判は違えず出入りの藝人も多かる中よ有名の落語家柱文治(現今の文治が父なり)の弟子よ文好といへる者或日師匠文治と供よ同邸へ招かきし時文治の豫て儲けある高座よ登つて落話央腹の工合やあしかりけん頻よ小便が出たくあり堪へ兼て疎相したを後に居た文好が早くも

りて文治の傍から湯呑茶碗よ湯を注ぐ爲してわざと湯呑を倒し是の鹿相を致しましたと狼狽ながら手拭もて湯と供よ掃除してそこらを体よく繕るい師匠の罪を我身よ衣四下繕るふ文好が頓智を早くも見て取る中野辰の中々の才子なりと心の中よ嘆賞し幾程もかく周旋して御本丸の奥防主に取立しとぞ又或夜邸宅の窓下を通る按摩を呼込み療治をせさたるよ醫術よ巧なるを知りおと醫よ取立やりしなど世の耳目を驚ろかす種々の行爲ある中よも中野の常よ汚なき着物を着賤しき人の業をして夜さく市街を忍び歩き下民の情

白新地



を採らんと辻君まで買たる人なりといふ中野の年三十八よ
 至るまでいまだ妻を娶らず縁談を勧むる人ある時の志士の
 頭を失なふを忘さず斯る場合に至りて絆となる妻子の嘗て
 用なしと朝夕酒を嗜むのみ他も樂しみのなかりしが常子が
 雄々しき風評を聞き我妻とならんもの常子の外もあるべか
 らずと彼頼政からなくに見ぬ戀も焦がきて引ぞ煩らふ中野
 の風情を夫と見て取る親類が人を以て常子方へ縁談を言入
 しま月下水人の爲業もや一たび佛門に歸依したる常子も中
 野の人と爲りを聞て嬉しく忽ち承知の旨を答へしかむ

縁談頼に整のふて安政三年十一月婚姻の式目出たく終りぬ
 此時常子は二十一歳その翌年男子を擧げ秀雄と名けて愛く
 しみ養育るうちよ昨日今日流るゝ光陰も淀みなく春の花秋
 の紅葉と樹梢の色を染換て秀雄が十歳といふ慶應二年の始
 より幕府の權威次第に衰るへ十四代將軍家茂長州征伐と
 して江戸城を進發の供奉も加へる中野の出陳妻の常子も別
 り臨み涙一滴目も持はず本夫を勵ます其様と繪様に譲りて次
 回も説べし

第十六回

去程よ徳川十四代の將軍家茂の長州征伐として江戸城を進
 發し西京に滞在在中時疫を犯さきて果敢なく薨去ゆりしかば
 隨從の一橋中納言宗家を繼ぎ程なく將軍の宣下あり是を十
 五代の將軍慶喜とす當時勤王佐幕の兩黨ますく盛んよ軋
 轢し遂に伏見の戰爭起り常子の本夫中野遠江守も此日の戰
 争よ花々しき軍して遂に戰死なしたりとの急報江戸の留守
 宅へ達せしも常子の豫て出陣のこの時よりも戰死と思ひ定
 めし事よしゆれば今更嘆き悲しまず只良人の亡跡をいと懇
 切よ弔ひつ今ぞ仇なる遺念の一子秀雄を養育る外他事もな

く憂げ中にも經つ月日いつしか明治元年と世はあら玉の王
 政復古幕府恩顧の人々の或は奥羽に戰死し或は農商に歸す
 るゆり又の静岡へ移住なすあり思ひくは離散をす中よ常
 子と領地なる常陸の土浦に退居して又四五年を過すうち廢
 藩置縣の令を布れ續て家祿奉還の令出しを以て恩賜の金と
 此年來貯へ有る金圓と合せて公債證書を買込み一子秀雄
 も追々よ成人なさば出京あし善師を撰びて修業させんと
 去明治八年中再び出京あし下谷金杉村に然るべし賣家
 のありしを地面と共に買求め母子もろとも移り住み秀雄よ

師しをを擇えらびて漢洋かんようの學がくを修おさめさせしし秀雄ひでおも頗すこぶる勉強べんきやう
 しおひしくく又上達しやうたつなせせ一いが若わかき書生しよせいの常つねとして或夜朋あるよともも誘さそ
 ひきてよし原はらへ浮うかき込み大門たいもん這入はいれ心仲なかの街右ちやうみぎへ折まがつて江戸
 一いの大文字樓だいもんじろうへ押登おしあがり逢洲あふしうといふを敵娼あいかたとして一夜やの春はるを
 買かひたりしが過世すかせ定さだまる縁えんもや互たがひも憎にくうらず思おもひ初はじめ鶏けいも啼な
 鐘かねも聞きこぬぬ里さとのゆきとまで契ちぎりを重かさね夫それが爲ためめ多おほくの金かね
 を遣つかひ棄すて家いえよとして居付ゐつかぬを常子つねこの深ふかく心配しんぱいし夫程それほど思おもひ
 ひ合あひた中なかなきなきばいつその事ことに根引ねびきして秀雄ひでおの嫁よめよしてやら
 んと子故まゆゑに迷まよふ粹まじな親人おやひとを頼たのみて逢洲あふしうの身みの上うへを探さぐらせし

是これも同おなじく幕府ばくふの旗はた下もと神崎與左衛門かみざきよざゑもんの娘むすめよて本名ほんめいをお絹おきぬ
 と呼よび父與左衛門ちちよざゑもん之の奥羽おくうへ脱走だつそうし數度すうどの戦争せんそうよ腰こしを打うて歩は
 行こう不自由ふじゆうの癡人かにはになり維新ゐしん後ごの四よッ谷や佐門町さもんちやうよ詫住居傘張わびをまゐからかさはり
 を職業しよくげらとし母ははのおいやと親子おやこ三人にん辛からくも浮世うきよと送おくり居ゐたり

第十七回

お絹おきぬが年とし十二じふにの秋母あきぼのお早はやの荷且かりめの病やまひよ罹かりて果敢はかなくな
 り跡あとに残のこりし廢人かたはの父與左衛門ちちよざゑもんの手助てだすけして海人あまが鹽焚しほやくか
 らき世よを兎とも角かくもして送おくるうち明治九年めいしちねんも春過はるすぎて稍暖氣やゝぬかよ
 かりしころ父與左衛門ちちよざゑもんの肺病はいびやうを煩わづらひ日毎ひごとに重おもる難症なんせうを孝かう

心深きお絹の看病貧苦の中にて甲斐なく去く父の病氣を癒
 さんと程遠うらぬお岩稻荷へ父の命を代らせたまへと祈る
 誠の通じてや或日お絹へ例の如くお岩稻荷へ参詣を
 踏で居る處を是も同じく参詣の善女と覺しき立派な年増が
 お絹の舉動は篤と眼を注ぎ娘盛の年齢にて憂身を憂す神信
 心失禮ながら見受た處ろ由あるお方の成の果か苦しからず
 にお身の上をといと親切に問るゝまよゝお絹の我身の概
 畧を詞短かよ話すを聞き彼の年増と感心なまゝと哀や増
 たりけん是と誠に少ですが是もて何ぞ父様のお好きな物でも

調のへて随分共々御看病必らず幸行と怠たり玉ふちと取ぬ
 といふを無理に押付け中の幾干かえら紙を包みて渡す情の
 恩賜名前も告ずる立去けるお絹の嬉しさ飛立つばかり夢路
 を通る心地して急ぎ我家へ立歸り病伏す父も有し次第を洩
 らさず告て包紙を披いて中を改むをば壹圓紙幣で數五枚か
 らる大枚のお金までお惠投下さる恩人のお名前も聞なんだ
 嬉しなまざれぬ忘れし落度悔しき事をしてけりと父子互に
 顔見合せ後悔話しのその折から門の戸がらりと引明て入來
 る差配の田口平藏かくと見るよりお絹の走出で是の大屋様

ようお入來といふ顔じろりと蚕取眼イヤあんまりよくも來
 ぬ相變らずの店賃催促親父が病氣との言譯もモウさんく
 聞倦た例もお前も泣付きるので佛心の平藏もべんくいだら
 ー待て遣す八ヶ月まで九圓足らずの滞金質なら流る月な
 れど店賃と流されぬ今日は是非とも方を付て貰へねば外の
 店子へ對しても差配の義務が立たせぬ金が無さば翌日限り
 店を明て貰ひませうと慈悲も情も荒々しく疊叩いて罵る聲
 病たる父も聞せじと氣兼苦勞に起たり坐たり其お立腹の御
 尤なれど今茲を店立されましては私しの兎もあれ病たる父

まで路頭も迷ふ果敢かい身の上どうも今少しの内と半分言
 せおますく追込みイヤ今日の何あつても待ませぬト眼も
 角立て威丈高苦り切たる手詰の催促お絹の何と言譯も泣よ
 り外の事ろさき胸の當惑思ひやるべし

第十八回

差配の尙も膝すりよせ今戶外まで側聞かせば見お知らずの
 人お五圓といふ金を貰つたとり些細な金なら兎も角も往來
 中で知らぬ人に故なく大金を貰つての後の崇が面例ゆる其
 筋へ訴たへねばならぬ筈もしろの恵んだ人け出ない時にと

んだ嫌疑を蒙りて迷惑よなるかもしれず底の差配の役目だ
 けどうとも罅を明てやる代り其五圓を滞はつた店賃の内へ
 納めておきな否なら今も言た通り店立喰すが夫でもよいか
 二つよ一つの返詞をしると理も非も分らぬ無法の差配苛酷
 い仕方と思へども素直な氣質の親と子が雨露を凌ぎし店賃
 と思へば流石争りひかね會々見たる紙幣の顔歡こふ問さへ
 かくくも差出す紙幣の數を改ため是丈受取ても四圓足ら
 ずの不足あり遠からぬ内皆濟さされば飽こと知らぬ強慾の
 熊鷹眼に紙幣ひつ掴み我家をさして戻りゆく狭き裏家の路

次傳ひ下水の踏板ふみ迂らし小溝の中へ片足踏込み摺むく
 臍を撫りながら聲怒らして獨り咄々こんち危険い溶し穴の
 明て居るのを長屋の衆ナゼこの差配よ告ぬのだ摺むいた臍
 の愈りも玄やうが買たばかりの駒下駄と洗ひ立の白足袋も
 こを此通り泥よした此損毛の誰が償のふ馬鹿くしいと怒
 鳴立をいお絹が隣家よ大工職の増田與市といふものあり一
 杯機嫌で走り出でモシ差配さんその損毛の自業自得と嘲弄
 されて眼を怒らせ何が自業自得でござるや薬鐘頭よ立つ湯
 氣れ燃るが如く罵しるを與市のわざと落付てサア其落し穴

の様な大穴が明たのも此間の霖雨に溝板が腐敗たゆる長
 屋の行事から貴君の所へ度々滂届け申しても地主が何だの
 家作人が斯だのと其儘も捨おいて自分が其穴へ落たのだから
 底で自業自得と言たのさと理の當然も遣込られ黄蘗を甜
 たる啞の如く顔をしかめて行く跡を心地よげ見送るをり
 から女房のお咲も出来りお咲のそのまゝ隣家なるお絹の家
 を音信て今日のお親父さんの御病氣のどうだへハイ難有う
 ムりますどうも永引バウリで敢果くしく行ません

第十九回

お咲は上り口も腰うち掛け夫の無お困りだらうね親父さん
 の病氣も永引といへばどんな店賃が長引たとて今壁越よ
 聞て居れば凸凹差配が因業を催促折角何處でかか貫ひのお
 金を攫つて行た様子あんまりな仕方だと亭主が一抔機嫌の
 悪徒戯わざと溝板を外しておき旨く溝へ落してやつたが是
 が世も謂ふ夫の糞で敵とやらよい氣味でとありませんかと
 班白も剝たか鋪築の齒をむき出して咄と笑への貫ひ笑せる
 お絹親子も暫しの憂を慰さむる便と見ぬて哀きあり斯てお
 咲は何やらんお絹の耳も口を寄せ囁やみ果て我家も伴行さ

聲を低めて云るやうモシお絹さん豫てお前がお依頼の親の
 爲よ身賣の一件或人又咄したら吉原の大籬大文字樓で抱
 たいと樓主がお前の寫眞を見て三百圓の貸どの事併しうん
 な澤山にお金の入る譯でもかしほんのお親父さんの病氣を
 癒す薬餌代の事なれば脱身をする時少しでも樂なやうよ百
 圓丈借ておけバ餘る位いお前が出稼した跡の私等夫婦が心
 を合せどんなよも看病して上るから其處等よと心配あいが
 成らう事なら娼妓よなるの廢た方がよいと思へどない袖と
 振をぬ此喩と言尾よ付て良人の與市も思按よ組たる手をは

ときノウお絹さん親の爲とて娼妓よなるは世間よ往々ある
 習をよどお前の様を孝行娘を苦海よ沈むるの惜いもの家の
 奴がモウ十年も若けれバ新宿あたりへ叩き賣りお前の代り
 よするものを夫も甲斐なき當坐の難義と仁者よ近き木訥の
 夫婦齊く慰さむる厚き情よお絹の嬉しく例よ變らぬ御親切
 難有う存じますどうぞ其大文字樓とやらへお世話なされて
 下さりませ併し物堅い親爺もよと思ひ込だる娘氣の止ても
 止らぬ氣組ゆゑ與市夫婦の承諾てお前ヶ左様いふ了簡あら
 お親父さんへの私等からよい様よ執成ませうと蜜よ出稼の

手續なし父與左衛門へは或華族へ奉公よ上ると云拵らへ百三十圓を前借して大文字樓の娼妓とありし其翌年二月中旬の事よして名も逢州と改めて全盛并ぶ方もなし與市夫婦の貧乏中にも預けらるるお絹の身の代百三十圓をもて所々の負債を償のひつ或の良醫を迎へて介抱等閑ならざりしも命數茲よ盡たり々ん憐れむべし與左衛門の其年の夏五月降りみふらすみ五月雨の軒の車どもろとも又切て果敢なき魂の緒れ黄泉の人となりよける斯と聞知る逢州のお絹が歎きの如何ばかり涙のちすぢの瀧あして止めもあへぬ吐血鳥

驅るが如く我家よ來り八千八聲叫べども逝て歸らぬ空蟬の亡骸よひたと寄添て父戀してふ簞蟲の啼音も細るばかりなり

第二十回

斯てあるべきよあらざれば與市夫婦を始め長家一同の助力よ依り其翌日父與左衛門の棺を送り出し香花院ある芝西應寺町の禪宗西應寺へ葬埋り果て跡懇切よ弔らひける是より先中野秀雄の逢州の許よ通ひ詰め深く契りを重ねつゝ笑ふて辛き晝よしての月日の駒の遅さを悲しみ泣て嬉しき夜半

おしてはくだかけの聲まだきを恨み間夫の勤の鬱晴し今日
も秀雄の逢洲の坐敷に長き流連の折から告越す與左衛門の
死去の訃報も逢洲の歎きを思ふて懇切に慰さめし上七十五
圓の金を與へて埋葬の入費を助くる男の親切その眞實は
だされてまどく深く鳴海瀧水洩さじと契りし中と聞知る
常子の意外の喜悅長男秀雄を誘のかした狐に齊しき傾城
と思ひ掛なき稀なる孝女思ひ出せば先づ年お岩稻荷へ參詣
せし時愛身を窺す一人の小娘其身の命を縮めても父の病を
癒さんと健氣を舉動よ哀を催はし五圓の金を恵みやりしが

其小娘の名も儲りお絹とやら言しと覺ゆ夫かあらぬか逢た
上もしその娘であらんよ母の娘も金を恵み忪の親の死去
も臨み埋葬の代を與へしとい過世定まる縁よこそ爰にて物
を思ひんより逢て仔細を聞ころよけれと思慮頓又決りしか
腕車を備て吉原なる大文字樓へと急がせ行く此日秀雄も
相變らず雨も降ぬに流連して逢洲の坐敷も遊びをりしが折
から駈來る新造お糸忙々しげに障子を明けモシ花妓へ婦人
のお客がお前んよ是非逢たいと尋ねて來たも急彼方へ通
しておきましたと言も逢洲の合點行かず女客とい誰ならん

と襦衣姿のまどやかよ客間へ入て顔見合せハツと計よ差俯
 き左右の詞もあらざるを夫と察して常子の差寄り思ふに違
 いぬお絹どのいつぞや四ッ谷のお岩稻荷で一度お目に掛つ
 たのち序もあらばお尋ね申さうと思つたのみにて打絶しが
 近頃人の風評よ聞バ親御のためよ苦海よ沈み痛く苦勞をか
 さるとやら何を隠さう卑妾のお前が二世と契りたる秀雄の
 母の常子といふものト聞てびつくり耻らふ逢州常子の尙も
 摺寄て如何なる事をや言出る例の次回を見て知りぬ

第二十一回

恁て常子の逢洲のお絹よ對ひ詞を和らげ私を秀雄の母あり
 との其許も知らずよ過せしからんが逢て話をして見れを荷
 且ならぬ往昔知己殊に其許の素性をも聞て優しき心掛思ひ
 合た中なきバ此母が身受して長男秀雄の嫁となし死水取て
 貫ふ積老の世話をバ頼みますと世よ打解たる粹な言葉よ夢
 かどむかりお絹の喜悅常子のやがて樓主よ掛合ひ逢洲の身
 代金三百圓餘を償ひて翌日の根岸の本宅へ引取る程に夫々
 支度をしなさいと後の事まで細々と吩咐置て歸宅なしぬ去
 程に逢洲の常子が粹な計らひよ苦海を脱て秀雄の妻と成上



りたる身みの出世しゅつせ素もとより思おもひ思おもひをし夫婦ふうふが中なかの交情まじわり深く取とり
 分わけてお絹きぬは思おもひあり義ぎある姑常子しやうじを主しゆうの如ごとく敬うやまふて能よく孝かう
 養やうを尽つくしつゝ、良人をつと秀雄ひでをも能よく仕つかへしかば家内かないも一つひとつの苦説くせつ
 なく爰こゝに光陰つまひを過おるうちお絹きぬが亡父なちち與左衛門よざゑもんの一週年いちねん忌きも
 當あたりし際さい姑常子しやうじの計はからひとして以前いぜんお絹きぬが世話せわにありし四よつ
 谷佐門町やさもんちの同長屋どうながやの人達ひかたちも厚あつく報酬むくひをなしつゝ、も取分とりわけ與よ
 市夫婦いちふうふも米こめを贈おくり金かねを與あたへ其日常子そのひつねこのお絹きぬをばいと花美はなやか
 又また糲つくり立たて同伴どうはん立たちて與市方よいちかたへ禮れいも來きたりし様さまを見て長屋ながやの人ひと
 々々も肝きんを潰つぶしお絹きぬが斯かく出世しゅつせしたも親孝行おやかうの餘慶よけいなりと見み

る人聞ひときく人語ひとかたり合あひ羨うらやまぬ者ものをかりしとぞ

附 言

お絹親子きぬおやこを苦くるしめたる彼差配人かのさはいにんの田口平藏たぐちへいざうの昨十五年さくねんの
 六月中ちゅうコレラ病びやうに罹かりて死去しきよし妻つまのお村三女むらじよのお作さく（五年）
 へも傳染でんせんし親子おやこ三人枕にんさんくらを併ならべて七日間かんなも死果しにたり
 單表話説秀雄たんへつたせしゆうじゆうのひとたび浮氣うはきの水みづの染込しみこみしか當座どうざをかりの
 睦むつしかりしが妻つまのお絹きぬが其以前そのいぜん廓くわに在ありしに事變ことかはり折目正をりめたいし
 く仕つかへるを結句心けつぐこころも忌嫌いみきらひ又またも心の狂出くるいだして昨年さくねんの春頃はるころより
 再ふたたび花街くわがいも入浸いりびたり稻本樓いなもとろうの稻葉いなはも馴染なじみ内うちを外そとなる放蕩はうどう

の以前いぜんに彌増いよまし烈はげしけれどお絹きぬの更さらも悒氣いんきの色いろなく影かげも
 り日向ひなたよなり氣兼きがねをなしつ幾度いくたびか異見おけんをしても糠ぬかに釘くぎうつ
 て變かはつた良人をうとの品行みうちつねこ常子つねこも遂ついも立腹りつぷくしかゝる性根しやうねの腐くさつた
 長男せがれは最早家もはやうちへの寄附よせつけぬと勘當かんぎやう同様やうばうやう放逐はうちやくせしをお絹きぬは悲かなし
 く又また辛つらく良人うとの心こころの外そとたのも妻つまの私わたしが取る揖かぢの不束ふつゝかゆるト
 嫁姑よめしやうご中睦なかむつましく暮くらすうちにもお絹きぬは母はの機嫌きげんよき折をりを親うかが
 ひ良人をうとの爲ためも詫わびつ詫わびらきわびしき光陰つさひを昨日きのふと過すぎ今日けふと
 暮くらすろの有様ありさまの第一回だいいくわいに委くわしく綴つづりし如ごとくなるが秀雄ひでおも近ちか
 頃ころ先非せんびを悔くひ親類しんるい等の執成とりなしもて漸やうやうく常子つねこを宥なだめつ、親子夫おやこふう

婦ふが元もとの鞆たもとへ再ふたたび圓まるく治おさまつたの本年ほんねん三月みづえの下旬しもぢなりと
 ぞ

春雨日記畢

明治十六年六月十四日出版御届
全 年全月十五日出版

〔定價金十二錢〕

編輯兼
出版人

静岡縣平民

鈴木 徳 輔

京橋區宗十郎町
拾壹番地斯文社寄留

通 三 丁 目 丸 善 書 店

賣 芝 柴 井 町 土 屋 忠 兵 衛

鎗 屋 町 大 和 屋 松 之 助

捌

日本橋室町三丁目 丸屋 鉄次郎

神田 雉子町 巖 冷 堂

全 小川町 秩 山 堂

日本橋室町 滑 稽 堂

書

木挽町壹丁目 万 字 堂

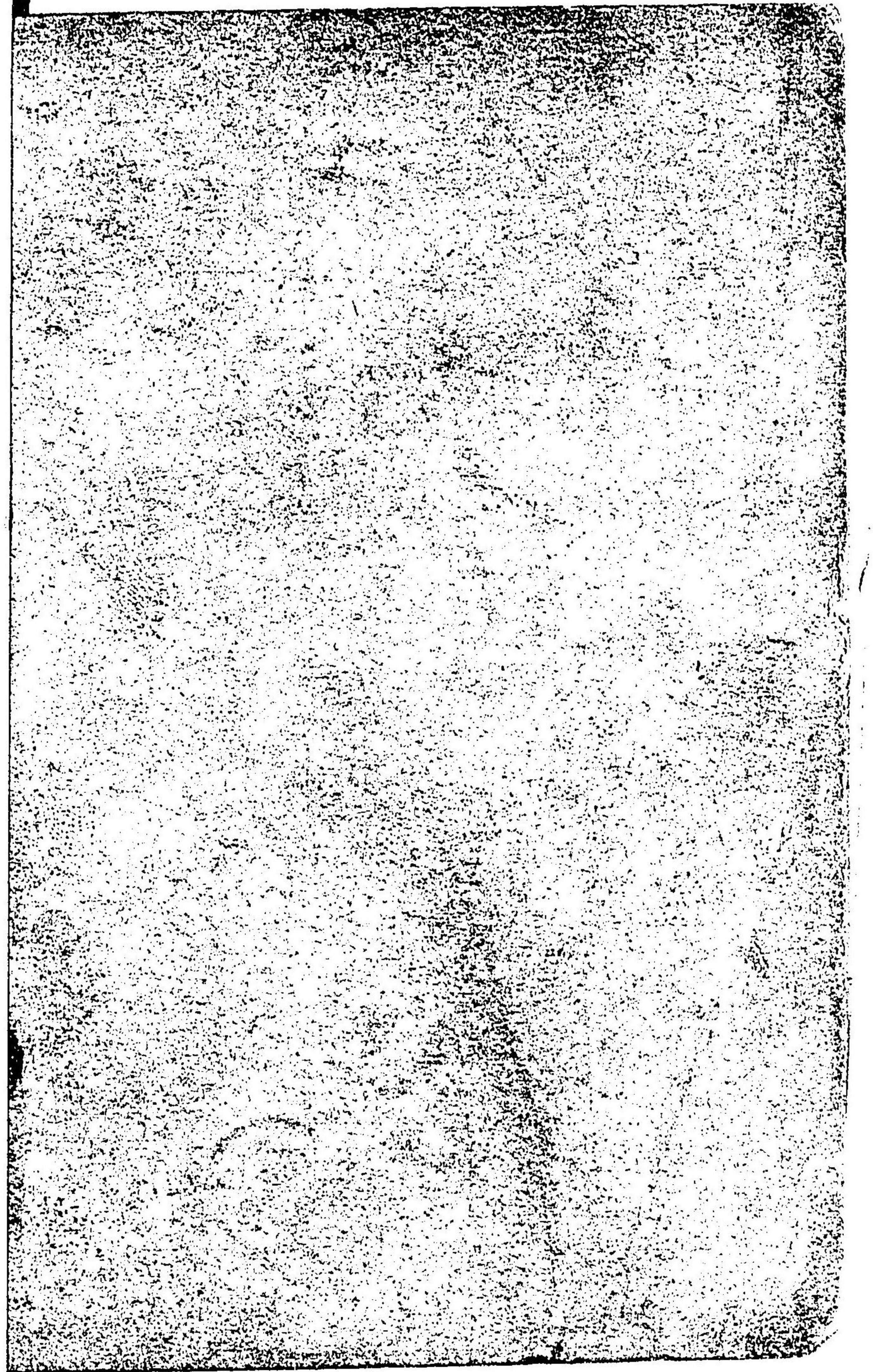
芝新櫻田町 春 陽 堂

元 大坂町 法木 徳兵衛

肆

通 油 町 藤岡屋 慶次郎

横 山 町 辻岡屋 文助





091282-000-8

特64-173

春雨日記

粹然閣

M16

DBN-2141

